

師戸帰帆

もろ人の諸戸の渡り行く舟の

ほのかに見えてかえる夕ぐれ

印旛沼の晴れた日の暮れ方、風が止んで波が静まり、

鏡のようになった広い湖面には、向う岸の山並が青墨色にくっきりと映し出されている。その中を、もろもろの

人を乗せた渡し舟が、白井の渡船場から対岸の師戸（現、印西市師戸）へゆったりと渡ってゆく。光勝寺の夕べの

鐘が鳴って、漁師の白帆舟も三々五々、師戸の河岸へ帰ってゆく。

三百年前の元禄時代、円応寺のそばに住んでいた「白井八景」の作者は、この辺りの湖岸から師戸へ帰る帆舟を眺めながら、一幅の絵のような美しい情景を楽しんでいた。そして、もろもろの人と師戸の人を掛けて、その秀景を前掲の歌に詠んでいる。

選文 立原 三知男